The 45th Annual Meeting of the Japanese Society of Pediatric Dermatology
The 45th JSPD 2021 in TOKYO

第45回日本小児皮膚科学会学術大会 ランチョンセミナー4

日時: 2021年7月4日(日)12:30～13:30
会場: 第1会場 ウェスティンホテル東京 B1F「桜」

アトピー性皮膚炎によく合併する発達障害と応用行動分析

座 長

大矢 幸弘 先生
国立研究開発法人国立成育医療研究センター
アレルギーセンター センター長

講演1
アトピー性皮膚炎によく合併する発達障害
演者 **大矢 幸弘** 先生
国立研究開発法人国立成育医療研究センター
アレルギーセンター センター長

講演2
応用行動分析学による子ども支援の可能性
演者 **奥田 健次** 先生
学校法人 西軽井沢学園
理事長

共催: 第45回日本小児皮膚科学会学術大会 / 大塚製薬株式会社 メディカル・アフェアーズ部

第45回日本小児皮膚科学会学術大会 ランチョンセミナー4

講演1 アトピー性皮膚炎によく合併する発達障害

小児のアレルギー疾患と発達障害は、共にこの半世紀先進国で急激な増加に直面した疾患である。特にアトピー性皮膚炎はアレルギーマーチの最初に発現する疾患として重要であるが、他のアレルギー疾患に較べて発達障害の合併率が高い。特に自閉症スペクトラム障害（ASD）や注意欠陥多動性障害（ADHD）など、近年著しく増加し注目を集めている発達障害との相関が高く、アレルギー診療の現場でもしばしば患者に遭遇する。しかし、重症アトピー性皮膚炎と同様に、治療に習熟した医師や心理士は少なく、大きなアンメットニーズが存在する。共に治療には薬物療法だけでは解決できないコツがあり、その重要なヒントが応用行動分析（行動療法）にある。今回のセミナーではその一端をご紹介できればと考えている。

演者

大矢 幸弘先生

国立研究開発法人
国立成育医療研究センター
アレルギーセンター センター長

略 歴

1985年 名古屋大学医学部卒業 半田市立半田病院研修医
1986年 名古屋大学医学部小児科（87年-90年大学院）
1991年 国立名古屋病院小児科医員（1995年ハーバード心身医学研究所短期留学）
1995年 国立小児病院アレルギー科医員（1997年～2002年ロンドン大学聖ジョージ医学校公衆衛生科学部上級研究員を併任し毎年短期渡英）
2002年 国立成育医療センター・第一専門診療部アレルギー科医長
2010年 独立行政法人国立成育医療研究センター生体防御系内科部アレルギー科医長
2018年 国立研究開発法人国立成育医療研究センター・アレルギーセンター長
同研究所エコチル調査研究部代表併任

資格・学会活動等

日本子ども健康科学会 理事長
日本アレルギー学会 理事・指導医
日本行動医学会理事
日本小児アレルギー学会 理事
日本小児皮膚科学会運営委員
日本健康心理学会 編集委員 前理事
日本認知行動療法学会 編集委員
日本小児科学会 専門医・指導医
日本疫学会 上級疫学専門家
日本心身医学会 専門医　　ほか

講演2 応用行動分析学による子ども支援の可能性

応用行動分析学は、精神科臨床や発達障害臨床、学校教育臨床などにとどまらず、社会的に重要な課題を中心に研究が行われてきた。現在、第3世代とされている認知行動療法(CBT)の中で、行動分析学を取り入れた臨床行動分析も注目されている。ところが、CBTあるいは臨床行動分析については、実証的に支持された治療の影響を受け、ランダム化比較試験(RCT)などの群間比較研究が多くを占め、個体の行動の変化を捉えるシングルケース実験デザインを用いた研究は少ない。応用行動分析学が得意としているシングルケース実験デザインを用いた評価や介入方法は臨床を行う実践家にとって有用なはずだが、十分に現場に浸透しているとは言えない。本セミナーでは限られた時間ではあるが、強度行動障害のある児童に対して応用行動分析学による介入事例をデータベースで紹介するので、用いられた評価方法や介入方法が受講者の分野・領域でどのように活用できるのか、その可能性を探っていただければ幸いである。

演者

奥田 健次先生

学校法人 西軽井沢学園
理事長

略 歴

2000年 吉備国際大学臨床心理学科　助手
2005年 桜花学園大学人間関係学科　助教授
2012年 桜花学園大学大学院　客員教授
2018年 学校法人西軽井沢学園　理事長　現在に至る